

保育者養成における保育内容「表現」の授業に関する一研究

——リトミック導入の可能性の検討——

菅沼 邦子

Investigation of classroom instruction for “expression”
in nursery school teacher training
——Potential of introducing eurhythmics——

Kuniko SUGANUMA

Abstract

The present study was designed to examine the effects of eurhythmics techniques on the students' learning in classes for “expression”, one of the core subjects in nursery school teacher training. The study method was twofold: (1) to discover the elements that the contents of nursery school education for “expression” and the purposes of the eurhythmics pedagogy have in common and (2) to conduct classes of *Expression III* using eurhythmics techniques and investigate, by a questionnaire, the students' evaluation of whether or not eurhythmics could be effective in understanding children's expressive activities. It was found that there were many overlapping elements between the aims in teaching “expression” in nursery school and those in the eurhythmics pedagogy. Also, the questionnaire results indicated that the students perceived the eurhythmics techniques to be conducive to enhancement of children's ability for expression. These findings led to the conclusion that the eurhythmics pedagogy could be an effective means of classroom instruction for “expression” in nursery school teacher training.

1. はじめに

保育者養成において、保育内容「表現」の授業はどうあるべきか。現在、保育者養成校では、さまざまな試みがなされている。オペレッタ、ペープサート、ドラマ（劇遊び）、手遊び、絵本の読み聞かせなど、その手法は多岐にわたっている。担当教員は限られた時間数の中で、学生自身の表現能力の向上と、現場や実習において即戦力として認められる応用力の習得を果たすために苦悩している。つまり、実態と理想の狭間で悩んでいるという現状がある。

保育を学ぶ学生は、さまざまな授業において、「子どもはあそびを通して学ぶ」こと、また

「子どもの表現をどのように読み取るか」「目の前の子どもたちが抱える課題にどのように支援したらよいのか」などの課題に日々取り組んでいる。しかし、学生の実態は、その学生自身があそびを知らないこと、表現の体験が少ないことを痛感させられる場面にたびたび遭遇する。その一方で、創造性を要する課題などに即座に優れたアイデアを出すことができたり、さまざまな場面で素直な感情を表すことができたりするなど、豊かな感性を持っている学生も少なくない。

保育の現場で、子どもと直接かかわる表現手段や方法、アイデアを持つことは有効かつ不可欠である。しかし、まず学生自身が“あそび”や“表現する”経験をし、一人の人間として豊かな感性を身につけること、持っている優れた感性を生かし、磨くことが、子どもの豊かな表現をはぐくむことのできる保育者に近づくための一歩となるのではないかと筆者は考えている。

さて、こうした実態を持つ「表現」の授業において、筆者は、スイスの音楽教育家エミール・ジャック＝ダルクローズが考案したリトミック教育が、保育を学ぶ学生の表現教育において有効な手法になるのではないかと考えている。そこで筆者は、「表現Ⅲ」の授業でリトミックの手法を導入し、学生自身に表現活動を行った。本稿では、保育内容「表現」の内容とリトミック教育の目的との共通性の検証、また学生自身がリトミックを導入した授業をどのように感じ、その経験が学生の保育実践力を獲得するために有効であるのかどうかをアンケートによって調査した結果を報告し、今後の表現の授業の在り方について検討する。

2. 保育内容「表現」

2-1 保育内容「表現」登場の経緯

子どもを取りまく環境の変化に対応するために、幼稚園教育要領は1989年に25年ぶりに大幅に改訂された¹⁾。その柱となる教育の基本は、①幼児の主体的活動 ②遊びを通しての総合的な指導 ③幼児の発達特性と一人一人に応じた指導、である。領域の考え方としては、“幼稚園教育全体を通して幼児に育つことが期待される心情、意欲、態度など”を「ねらい」とし、“それを達成するために教師が指導し、幼児が身につけていくことが望まれるもの”を「内容」とし、「ねらい」と「内容」を子どもの発達の側面から編成したものである。

昭和39年版幼稚園教育要領では、健康、人間関係、環境、言葉、音楽リズム、絵画製作の6つの領域であったものが、1989年改訂では5つの領域になった。この5領域とは、健康、人間関係、環境、言葉、表現であり、ここで初めて「表現」が登場する。当時から「表現」は音楽リズムと絵画製作がひとつにまとめられたものと考えられがちであったが、さまざまな解説や

テキストなどで、教科的でない、子どもの“表現したい”という気持ちを大切する考え方であることが繰り返し述べられている。

今年「表現」登場以来2度目の改訂の年にあたるが、表現に関する考え方に大きい変化は見られない。平成21年度版幼稚園教育要領、領域「表現」に関するねらいは次のとおりである²⁾。

表現 [感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする]

1 ねらい

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

ここで示されている通り、領域「表現」のねらいは、豊かな感性を持つことと表現を楽しむことである。音楽リズム、絵画製作では歌を歌ったり、絵を描いたりする活動自体がねらいだったのに対して、活動を通して心情、意欲、態度などが育つことが重視されている³⁾。かつて、ややもすると小学校以上の教科的、あるいは大人の満足をねらったような合奏や合唱などの反省から、素朴な表現であっても子どもが表現することそのものを楽しむこと、表現したいという心情、意欲、態度が重要視されていることを忘れてはならない。

2-2 幼稚園教育要領「表現」の内容と音、音楽を媒体とした表現について

以下は、幼稚園教育要領「表現」の内容である。(傍線は筆者による)

2 内 容

- (1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、あそびに使ったり、飾ったりなどする。
- (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

傍線の部分は、特に音や音楽を媒体とした表現に当たる事項である。筆者は、音・音楽に関わる表現にリトミック教育が効果的であると考えている。リトミックについては次章に記すこととする。

2-3 幼稚園教育要領「表現」内容の取扱いについて

以下は、幼稚園教育要領「表現」内容の取り扱いである。(傍線は筆者による)

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、さまざまに表現することなどを通して養われるようにすること。
- (2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。
- (3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるように配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

内容の取扱いで示されている求められる教師像は、「子どもと感動を共有することができる教師」、「子どもの表現を受容し、表現意欲を受け止められる教師」、などである。筆者は、子どもと感動を共にし、子どもの表現を受け止められる教師になるには、教師自身がさまざまな事象に対し、感動できる豊かな感性を持つこと、また、教師自身がさまざまな表現方法で、自身を表現する体験をすることだと考える。これは、保育を学ぶ学生にとっても同じことである。

2-4 本学の「表現」に関わるカリキュラム

本学幼児教育心理学科の表現に関する授業は、保育内容「表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」であり、各授業とも半期15回（各2単位）となっている。表現Ⅰは音楽を専門とする教員（筆者）、表現Ⅱは美術を専門とする教員、そして表現ⅢはⅠ・Ⅱの2人の教員が担当している。

それぞれの授業内容として「表現Ⅰ」では、表現Ⅰ（2年前期）かつⅡ（2年後期）、Ⅲ（3年前期）まで流れのある一連の授業のプロローグとして、「人間にとって表現とは何か」を講義、テキスト学習、ディスカッション形式で行うことから始めた。そして「子どもの日常の表現を見取る」ことをテーマに、幼稚園での観察実習を行った。その上で、音・音楽を媒体とした表現をテーマに、あそびうた、音楽活動など、実際的な活動の学習、そして部分実習という流れで行った。「表現Ⅱ」では、“子どもの図画工作に関する基礎的な知識や技術を身につけ、それに関連する様々な活動を通して、図画工作における表現の楽しさや喜びを体験し、保育の中で取り扱う教材やそれらを展開するために必要な図画工作の発展、応用的な知識や技能を身につける”ことを授業のねらいとしている。

そして本研究の対象である「表現Ⅲ」では、「子どもと感動を共にし、表現に結び付けられる教師」、「子どもの表現を受容し、表現意欲を受け止められる教師」になるための方法として、自らが「表現すること」を楽しみながら体験学習することを目的に、15回中9回をリトミックの手法で行った。あくまで、保育現場での直接的な子どものための活動ではなく、一人の人間としての表現を考えた活動内容とした。

3. リトミックについて

3-1 リトミック教育の概念と歴史

リトミックはスイスの作曲家、音楽教育家であったエミール・ジャック＝ダルクローズ (1865-1950) によって考案された音楽教育法である。ダルクローズは、和声学の教授として教鞭をとったジュネーヴ音楽学校で、“多くの学生が高度な技術を持ちながら、音楽を感じたり表現したりできないことを痛感し、心と身体、感覚と表現の間を取り持つ方法を模索する”⁴⁾。ダルクローズは、生きた音楽教育に最も重要なものは、「リズム」であり、「リズムは動きである」⁵⁾ とし、音楽の様々な要素を、筋肉運動を通して体験的に学習し、学生とのさまざまな練習方法の実験により、リトミックと名付けたこの方法を確立する。このように音楽教育として始まったリトミックであるが、ダルクローズの思想は、音楽を通し「身体、知能、感情の調和を図る」という壮大な、人間教育としての理念を持つようになる。そしてその練習方法などからさまざまな芸術分野、療法分野、また幼児教育などに発展、応用されている。つまり、リトミックは音楽による教育、音楽のための教育の2つの側面を持つものである。

リトミックが日本に導入されたのは、1900年代初め、ロンドンでリトミックを学んだ歌舞伎俳優、二代目市川左団次が、演劇俳優に必要な身体表現方法の基礎として取り入れたことに遡る。その後、ドイツで学んだ作曲家山田耕筰、舞踏家伊藤道郎らは帰国後、舞踏家石井 獏らとともに学校舞踊教育にリトミックを取り入れた。

教育分野においては、パリで学んだ音楽教師小林宗作が、1925年以降、リトミックを基盤とした人間教育「総合リズム教育」を提唱し、小学校、幼児教育にリトミックを取り入れた。また同じくパリで学んだ体育教師天野 蝶は体操教育にリトミックを取り入れた「天野式リトミック」を提唱し、保育・幼児教育に普及させた。

現在の日本におけるリトミックは幼児教育における役割が大きく、幼稚園、保育所、音楽教室、子育てを支援するサークルなどの幼児教育、保育の場で行われている。

3-2 リトミックの指導計画の方法について

下記表1は、ジュネーヴ・ジャック＝ダルクローズ学院で教鞭をとっていた Madeleine Duret 女史が作成したダルクローズのリトミックの〔テーマ〕・〔手段〕・〔鍛えられる能力〕をリストにしたものである。これは主に指導計画時に参照されるものである。

表1 【ダルクローズのリトミック】

<p><テーマ=目的></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 拍 2. メトリック <ol style="list-style-type: none"> A) 拍子 B) 拍子の変化 C) バイナリー・ターナリーの交代 D) トランスフォーメーション E) ポリメトリー F) 12拍の分割 G) 不等拍 3. リズム 4. ポリリズム 5. アナクルース・クルース・メタクルース 6. シンコペーション 7. 補足リズム, 裏拍 8. フレーズ 9. 形式 10. 休符 11. カノン 12. 倍加半減 13. ダイナミクス, 長さ, 触感の比較 14. メロディー, ポリフォニー 	<p><手段></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 時間・空間・エネルギーの関係 2. 聴覚, 視覚, 触覚反応 3. 連携と分離 4. 誘発と抑制 5. 自動性 6. 体系化 7. グループ練習 8. 即興性 <p><鍛えられる能力></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 動きの調整 2. 動き 3. 記憶力 4. 集中力 5. 方向感覚 6. 社会性 7. 想像性
--	---

このリストにある項目は簡略化されており、実際、テーマ=目的は、〈リズム〉、〈ソルフェージュ〉、〈即興〉からなり、それぞれ20数項目からなる音楽の要素が学習される。また、手段や鍛えられる能力についても同じく、書かれている以外のものも挙げられる。

先に述べたように、リトミックは、「音楽のための教育」と「音楽による教育」の側面の2つを持つ教育である。実際、音楽学習を主なねらいとしたリトミックのレッスンを組み立てる際、まずそのレッスンの、あるいは一つのエクササイズのテーマ=目的（リズム・ソルフェージュ・即興から音楽の要素の一つ）を選択し、それをどのような手段によって行うのかを考える。そして、そのエクササイズによって鍛えられる、育まれるべき能力は何かを分析する。このように対象が音楽学習、すなわち「音楽のための教育」の場合には、このテーマ=目的が上記表のテーマ=目的、音楽の要素になる。しかし、対象が乳幼児や老人、音楽療法などの場合、すなわち「音楽による教育」の場合、テーマ=目的は上記表の鍛えられる能力のリストから選択されることになる。その場合、音楽の要素は、そのテーマ=目的を達成するための手段になるわけである。

幼児を対象としたリトミックを行う場合、その活動を単純に「音楽による教育」と「音楽のための教育」とに線引きすることは困難であろう。しかし、活動のねらいを明確にし、2つの側面のバランス（比重）を考えることはとても重要である。それでは、保育、幼児教育におけ

るリトミックの役割はどうあるべきだろうか。先に述べたように高い音楽の技術を求めるものではなく、あくまで子どもの“表現したい”という意欲を育むことが大事なのである。従ってリズムが正確にたたける。音程が正しく歌えることよりも、音楽を身体全身で楽しく表現できる、というようなことが望まれる。すなわち「音楽による教育」の比重が大きくなければならない。教師は、音楽を通しての教育をするわけであるから、音楽の知識や技術を身につけることは当然必要になるが、リズム訓練や規律のための反応訓練的活動に終始することなく、子どもの発達過程を観察しながら、乳幼児期に最も必要な、感性、情緒面、コミュニケーション能力、などを、音楽を通して育むことを目的とすることが大事だといえる。これは、保育内容「表現」と共通した考えであるといえる。

以下にあげる表2は、ダルクローズが音楽療法のための練習方法として6つの働きに分けたものである⁶⁾。ダルクローズのリトミック教育の理念を“身体、知能、感情の調和のとれた人間形成”をねらいとしたもの、ととらえた場合、これは療法としてのみならず、全人に共通したリトミック教育を通して身に付く能力のリストと考えることができると筆者は考える。

表2

A	注意力, 集中力, 自分自身の統御, 記憶
B	空間の認識, 身体の認識
C	他人との接触, 責任感, 社会的統合
D	均衡, 運動の整合, 自立した身振り
E	想像, 感受性, 音楽性, 個性, ニュアンスの感覚
F	リラックス

4. 幼稚園教育要領「表現」とリトミック教育の共通性

ここでは、幼稚園教育要領「表現」2内容と、リトミック教育の目的・手段・鍛えられる（育まれる）能力とを照らし合わせ、その共通性を検証する。

表3に示すように、幼稚園教育要領「表現」2内容と、リトミック教育の目的・手段・鍛えられる（育まれる）能力には多くの共通性を見出すことができる。このことからリトミック教育が子どもの豊かな表現の育成に寄与するといえるのではないかと考える。

筆者は、子どもの豊かな表現を育むためには、保育者自身が豊かな表現力を持つことが必要であると考えている。従って、保育を目指す学生自身が表現する体験が必要であるという考えのもとに、「表現Ⅲ」の授業を行った。

表 3

幼稚園教育要領「表現」の内容	リトミック教育
生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。	表1-テーマ=目的(音楽の要素)/手段1. 時間・空間・エネルギーの関係/手段2. 聴覚・視覚・触覚反応/鍛えられる～1. 動きの調整 2. 動き 5. 方向感覚
生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。	表1-7 想像性/表2 E-想像, 感受性, 個性
様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。	表1-手段7. グループ練習/鍛えられる～6. 社会性/-表2-A自分自身の統御 C-他人との接触, 責任感, 社会的統合 E-音楽性, 個性
感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。	表1-テーマ=目的(音楽の要素)/手段1. 時間・空間・エネルギーの関係/鍛えられる～1. 動きの調整 2. 動き 5. 方向感覚/表2 B-空間の認識, 身体の認識/E-想像, 感受性, 音楽性, 個性, ニュアンスの感覚
音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。	表1-テーマ=目的(音楽の要素)/手段2. 聴覚 7. グループ練習 8. 即興性/C-他人との接触, 責任感, 社会的統合/E-音楽性, ニュアンスの感覚
自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。	表1-手段7. グループ練習 8. 即興性/鍛え～2. 動き 7. 想像性/表2-E-想像, 感受性, 音楽性, 個性, ニュアンスの感覚

5. 授業実践

5-1 授業目標〈本校、保育内容(表現Ⅲ)シラバスより〉

・子どもの豊かな感性や心を、幼児の表現活動を通して育てるために必要な能力をボディーテクニック、発声、歌唱表現、身体表現、ボディーパーカッション、楽器アンサンブル、即興演奏など、さまざまな表現方法の基礎をリトミックの手法により習得する。

5-2 授業内容

ここでは、研究対象とする第1回から第9回の授業内容(要約)を記す。

第1回: 合唱曲(カノン)を身体の動きをつけて表現する

第2回: 音のイメージを身体表現する。動きの模倣。コレグラフィー(音楽の視覚化)。

第3回: ことばのリズムを使った身体表現 ① 絵本“くりくり”

第4回: ことばのリズムを使った身体表現 ② 詩“かっぱ”ほか

第5回: 音楽の要素(拍・拍子・メロディー・など音楽の主要素)を聴覚と身体表現によって習得するリトミックの練習

第6回: サン＝サーンス作曲“象”をコレグラフィーする。グループによる創作活動

第7回：サン＝サーンス作曲“序曲～ライオン”をコレグラフィイーする。グループによる創作活動

第8回：舞台発表

第9回：発表のビデオ鑑賞，ディスカッション

5-3 結果

授業後に、受講した学生を対象にアンケートを実施した。アンケート配布数は78名、回収数は73名（回収率は93.6%であった）。

アンケート

表現Ⅲの授業でのリトミック（音楽を身体表現する）の学習は、子どもの表現活動の良さを理解するなど、保育、幼児教育に携わる際に、役立つと思いますか。下から選んでください。また、選んだ理由を書いてください。

5. とても役に立った 4. 役に立った 3. どちらでもない 2. 役に立たなかった 1. 全く役に立たなかった

〈結果〉

- 5. とても役に立った（47名）64.4%
- 4. 役に立った（26名）35.6%
- 3. 2. 1.（0名）0%

〈理由〉（カッコ内は類似した感想数）

《自身の表現力向上》を理由とした感想（24）

- ・自分自身が身体全体で音楽を表現することのおもしろさを知ることができた。それが子どもの表現活動に役立てることができると思った。
- ・保育者自身が楽しんでいないと子どももおもしろくない。
- ・自分自身が表現を経験したことで、子どもの表現を肯定的に捉えることができると思う。

《個々の表現》を理由とした感想（17）

- ・いろいろな人の感じ方や表現の仕方を見ることができたことで、子どもの個性を捉える事ができると思う。
- ・さまざまな表現があることを見たことで、できる、できない、ではない、正解がない世界が

あることを知った。(違っていいんだとわかった)。

《音楽・リトミックの効用》(12)

- ・リトミックはことばよりも子どもの心に響く時があると思った。
- ・ことばで表現できない子どもが、音楽では自分を表現できることもあると思う。
- ・音やリズムのおもしろさを感じることができ、それを子どもと一緒に楽しむことができると思った。
- ・リトミックは身体を使うだけでなく、心がほぐされる。
- ・音楽は自然に身体の中に入ってくるものだと実感した。
- ・自然に体が動くようになった。子どもの本来姿だと思う。
- ・音楽に合わせることで、自分の中にある気持ちを表現できる。
- ・自分自身が音楽になっているということを実感できた。
- ・音楽の身体表現は表現力、想像力、感性をはぐくむことができる。
- ・うたったり、演奏したりするだけでなく、そのほかの音楽表現の方法を知ることができた。

《身体運動》(2)

- ・身体表現することで、音楽に興味を持てる。
- ・身体を動かすこと、表現することの楽しさを味わえた。

《子どもの発表の場として》(2)

- ・運動会や発表会などで使える。

《学習効果として》(2)

- ・音楽の要素など音楽学習に結びつく。
- ・他者からイメージを引き出すためにどういったことばかけ、関わりをすればよいか考えるきっかけになった。

6. 考察と課題

アンケートより、学生がリトミックによって表現する楽しさを経験し、表現力の向上を感じることができたことがわかった。またこのことが、子どもの表現を受容することや子どもと表現の楽しさを共有することと結び付いていると学生自身は感じたということも知ることができた。さらに、リトミックは多くの場合、集団で行われることから、他人の表現を見る機会にもなり、それが一人一人の個性を認めるきっかけとなりうるということ、また、音楽を通して、一つのものを作っていく活動の効果があると理解したことがわかった。現代の学生は、ある目的に向かって複数の人数で取り組むという機会がスポーツなどを除くと極端に少ない。主な理

由としては、あそびの変化、核家族化、少子化などが挙げられるだろう。このような環境の中で、リトミックのグループで行う活動は、これら複数人で一つのものを作り上げる点で、他者とのコミュニケーション能力、他者を理解する能力、他者を利用する能力、また自分の居場所を知る力など、まさに今の時代に必要な能力を培う教育法ではないかと感じた。

音楽からの観点では、音楽の持つ力を感じ、音楽・心・身体の関係性を学生なりに身体で感じていることがアンケートから読み取ることができた。ダルクローズは「音楽は一般教育において、ある重要な役割を果たすべきだ。なぜなら、音楽は人間の最も多様な欲求に答えるからだ。運動したい、自分の考えを述べたい、自分自身から脱け出したい、夢みたい、雄々しくあるいは奔放に、あるいは喜びに満ちて行動したい、忘れたい、説得したい、慰めたい、等々。音楽という、感情の直接的表現は、願望を純化し、弱点を抑え、力を刺激し、観念が必要とするものを満たす⁷⁾。」と述べている。このような音楽の力を、リトミックの活動を通して感じることでできる優れた感性を持つ学生がいたことは、特筆に値する。感性と表現の関係性についてはさらに追求したいと思う。

9回の授業では、授業のねらいを深く学習、理解することは困難である。これからさらに学生自身が経験することを重視した授業を継続することが必要であると考え。その上で、保育の実践現場での内容に答えることへの橋渡しが必要となるであろう。今後の課題は、不十分ながら経験し、体得した表現力を、実際の保育現場においてどのように実践していくか、またどのように子どもと共有し、還元していくかである。

7. お わ り に

今回研究対象とした授業を受講した学生は、本学科第一期生である。本学本学科においてこの授業は、教員、学生とも初めての試みであった。従って、今年度はかなり実験的に行なった部分が多かったことは否めない。また、現時点での検証は、学生の立場からの感想にとどまっている。今後、この授業を受講し、保育者となった者を対象に、保育者としての立場から検証、追跡調査をすることが必要であると考え。それらを含みつつ、今後も地域に即した保育を鑑みながら、本学本学科の特徴、学生の特性を生かし、それに適した授業展開をさらに研究したい。

引用および参考文献

- 1) 文部省 1989『幼稚園教育要領（平成元年版）』
- 2) 文部科学省 2008『幼稚園教育要領（平成21年版）』
- 3) 大畑祥子 2006『戦後音楽教育60年』開成出版
- 4) エイブラムソン, R. 1994『音楽教育メソードの比較—コダーイ, ダルクローズ, オルフ, C・M—』全音楽譜出版社
- 5) ジャック＝ダルクローズ, E. 2003『リズム・音楽・教育』（河口真朱美訳）, 開成出版
- 6) フランク・マルタンほか 1977『エミール・ジャック＝ダルクローズ』全音楽譜出版社
- 7) フランク・マルタンほか 1977『エミール・ジャック＝ダルクローズ』全音楽譜出版社